



UWC東南アジア校の近代的な校舎

した。余談だが、UWC留学当時、経済誌Economistの主要各国経済指標欄を見ては、ぶちぎりのパフォーマンスの母国日本を誇りに感じていたものだ。読者の皆さんには笑われるかも知れないが、私は日本企業および日本の復活を心から信じている。

ポストンコンサルティンググループ(BCG)に就職以来、日本を代表する企業の国内外の課題に 대응できるのである。コンサルトになることを目指して、東京事務所に加えてポストンやパリ、上海事務所にて研鑽を積んできた。ここ半年ほどはある日本企業の中国事業のお手伝いをさせていただいているが、当記事の執筆依頼を受けてUWCでの経験について振り返ってみて、留学当時苦労したことが現在の糧になっていることに改めて気づかされる。

まずは英語。このメーカーの中国トップは日本語を話さないため、プロジェクトの共用語は英語である。ヨーロッパの小国スイス発祥のグローバル企業ネスレのように、四〇年後(今の高校生が役員になる頃)、勝ち組日本企業の役員会が英語で行われていても何ら不思議はない。

加えて、私にとって英語よりも大きなインパクトを持つのが、「考える力、考える習慣」である。職業柄多くの日本企業と付き合い合わせていただいているが、元気がいい企業とそうでない企業を分ける最大の要因は「意思決定力」だと常々感じている。「赤信号、皆で渡れば恐くない」的な周りへの追従ではなく、時代を切り拓いていく意思決定に必要なのは、「自分の考え」。中国を例に取ると、マスコミの論調は明らかに偏っており、楽観論・悲観論の両極にふれがちである(最近「中国はすごい!」という論調が大勢のようだ)。そんな中で、いかに的確な「自分の考え」を持ち得るかが、中国で事業を展開していく上での大前提となる。

UWCのサポーターとして

ビジネスの世界では「リスクないところにリターンはない」と言われるが、UWCへの留学はローリスク・ハイリターンだと

思う。「日本に残れば東大に入れたかも知れないのに、よくシンガポールに行くなんていう中途な決断ができたねえ」とよく言われたが、仮にUWCで失敗したら大検を受ければよいわけで、よくよく考えたらリスクなんて全くない。一方、前述のようにUWC留学のリターンは限りなく大きいし、しかもほぼ一〇〇%約束されている。

UWC留学当時は自らの英語力上達に大いなる達成感を感じ、「僕も捨てたもんじゃないな」と自信に思ったものだが、今冷静に振り返ると、そうした成功体験はスポンジのような吸収力を有する高校生であれば誰でも成し遂げられるもの。いわば、お膳立てされた成功体験である。成功体験が人間を大きくするとよく言われるが、UWCはそういう意味から見ても、非常によく設計された最高の教育の場であった。

では、最高の教育の場への進学を阻む壁は何か。一に親の反対、二に奨学金の不足である。悲しいかな、われわれの世代(三〇代以上の家庭人・企業人)がボトルネックになっているのである。UWCにチャレンジしたいと考える高校生は数多い。成長途上の一社会人として更なる研鑽を積むとともに、ぜひとも将来の日本復活を担うといういった若き高校生のサポーターになりたいと思う今日この頃である。

「自分の考え」を 持ち始めた留学時代



栄光学園高等学校からUWC東南アジア校に留学(シンガポール、一
九八九〜九一年)。九四年ケンブリッジ大学物理学科卒業。モニター
カンパニーを経て九七年ボストンコンサルティンググループ入社。

森 健太郎
もり けんたろう

ボストンコンサルティンググループプロジェクトマネジャー

●(社)ユニテッド・ワールド・カレッジ(UWC)日本協会は、世界各国から派遣されてくる生徒たちとの教育体験の共有により、国際感覚豊かな人材を養成するという理念を掲げるUWCの日本委員会として、毎年一〇名以上の高校二年生を世界各地にあるUWC傘下の高校に派遣し、すでに三六〇名以上の卒業生を輩出している。

工林のような環境で育った私に、所詮自分の考えなど「特にならぬ」のだ。事あるごとに自分の考えを聞かれ、「なぜ? なぜ?」と問い質されるのは、そんな私にとって極めて苦痛だった。

化学の実験と伝言ゲーム、 一番上の子は男の子?

UWCで生活を始めた頃、苦手にしていたものが二つある。

一つは化学の実験。指示書を拙い英語で何とか読み解きながら実験を進めるのだが、途中で気がつくとかラスの皆は青い液体なのに自分のだけ赤かったりする。化学の実験は一度手順を間違えるとそれでおしまい。当時は毎週のように失敗を繰り返し、先生にも露骨に劣等生扱いをされて、悲しい思いを随分した。

もう一つの鬼門は伝言ゲーム。なぜって? 私のいるチームは私のせいで似ても似つかない「伝言」になってしまうから。当時の私の英語力は相当ひどく、「初めて

Kenjaroに会った時、Hi, how are you?と挨拶したら、KenjaroはPardon me?と聞き返したのよ。その頃に比べたら本当にうまくなったわね」と、クラスメイトには後々までからかわれた。

戸惑ったのは英語だけではない。ある日、他愛のない雑談の中で「将来子どもをつくらせたら、一番上は男の子がいいなあ」と何気なく言ったら、「何で男の子がいいの? 女の子じゃ駄目なの? Kenjaroは女性差別なんじゃない?」と女性陣から集中砲火を喰らった。また、「日本人は鯨を食べるって聞いたけど、お前は捕鯨についてどう思う?」(何を隠そう、私は小学校の給食の鯨の唐揚げが大好物であった)など、「自分の考え」を聞かれることが多かった。中高一貫の私立男子校という杉の人

一三年後の今、 経営戦略「コンサルタントとして」 日本企業の中国戦略をお手伝い

そんなこんなスタートだったが、UWCでの二年間は夢のように楽しく、夢のように過ぎ去っていった。卒業後は恩師の推薦でケンブリッジ大学に進み、その後も心臓をテーマに博士課程を履修することが内定していたが、大学院進学前に少し社会を見ておこうと二年間限定のつもりで就職した経営コンサルティングに天職を見出し、今日に至っている。当時二二歳、振り返るといささか生意気かつ青臭いものがあるが、「職業人生を捧げるべきは、心臓の弱った患者ではなく、日本社会、中でも日本企業の復活ではないか」と真面目に思い、決断